

## 技術教育研究会と私の歩み

⑥

佐々木 享

### 日教組の中央教育課程研究委員会に参加する

1950年代の末期から60年代の初めにかけて、日教組中央は、学習指導要領全面改訂を直接の契機として、いわゆる教育課程の自主編成の運動に熱心に取組んでいた。その活動の一環として、1961年夏(日付失念)には本部教育文化部の下に中央教育課程研究委員会が組織された。実際の作業は各教科ごとに組織された小委員会が行ない、全国教研集会の本部講師(後に助言者、さらに共同研究者と改称)や東京とその近郊の教組から推薦された現場教師が委員となった。私はこの技術教育小委員会に委員として参加した。前述の『教科書批判』はこの委員会のしごとだったのかも知れない。この委員会は日常的に研究会を開催していたので、改築前の日教組の教育会館やその隣の一橋寮にはよく通った。

この委員会の主な仕事は、夏の教科研究集会の開催、冬の全国教研集会の分科会への活動報告書の配布、その分科会に司会者の一人として参加すること等であった。私もこの役割で教研全国集会に参加したことがある。当時の教研全国集会では、毎日、司会者がその日の討論の模様をまとめて翌朝配布する『速報』の記事を書き、そのうえ最終日の前日には最終日に配布する「中間報告」をまとめていた。司会者の負担が大きかったので、中央教育課程研究委員会から派遣された者が援助していたのである。他の教科は夏期の教科研究集会を毎年のように開催していたが、技術教育の集会は二三回しか開催されなかった。

この委員会の成果の一つは、各小委員会ごとに、発足以来の全国教研の分科会の歴史をまと

めた冊子を作成したことである。技術教育の場合は、日本教職員組合編『国民のための教育実践 技術編 日教組教研14年のあゆみの上に』(1965年)としてまとめられた。

### 技教研の民教連への加盟

先頃私の書齋を整理していたら、古い『民教連ニュース』が出てきて、技術教育研究会が民教連(日本民間教育研究団体連絡会)に加盟した年月が判明した。すなわち、『民教連ニュース』No.6(1965年2月20日発行)の「告知板」という欄に「去る二月三日に民教連世話人会を開き、次の点を協議した。①技術教育研究会(事務局責任者・原正敏)から民教連加盟の申込みがあり、世話人会としてはこれを了承し、次回の代表者会にかけて正式に決めることにした。」とある。次いで『民教連ニュース』No.7(1965年8月5日発行)に掲載された同年7月3日の民教連代表者会に関する記事の中に、「技術教育研究会から『加盟申請』が提出されている、と世話人会から『新加盟団体』として提案があり、それを満場一致で確認した。」とある。こうして、技術教育研究会は原正敏事務局長時代の1965年7月3日というかなり早い時期に、民教連へ加盟したことがわかった。

### 技教研と産業教育研究連盟との関係

技術教育関係の民間教育研究団体としては、私たち技術教育研究会が発足する以前から産業教育研究連盟(産教連と略称)が活動しており、国土社から『技術教育』という月刊雑誌を刊行していた(1960年代のある時期までは、産業

教育研究連盟と『技術教育』編集部とは別個の組織となっていたらしかつた)。産業教育研究連盟にくらべると私たちは後発団体だから、当然に産教連との関係が問題になったはずだが、技術教育研究会として組織的に議論したことはなく、したがって文書もない。原先生も私も早くから産教連に加盟していたし、少なくとも発足当初10年間程の技教研は、産教連にくらべると実質的には極めて小さなサークルだったから、関係が問題になるはずもなかった。原先生が『技術教育研究』の創刊号(1972年1月)に寄せた「技術教育研究運動の現状と課題」において両者の関係に触れたのが、両者の関係を論じた最初だったように思う。この原先生の文章には向山玉雄氏の反論もあったことなので、ここでコメントすることは、差控えたい。

### 私と産業教育研究連盟との関係

産業教育研究連盟の夏の大会に私が初めて参加したのは、1960年8月に千葉縣市川市で開催された第9次夏季研究大会だった。これ以後、何回か参加した。夏の大会の他に、國學院大学で開かれていた研究会に顔をだしたこともあった。ところがある日の研究会で、某氏が私の発言を、「それは学者のいうことで、現場の教師がいうことではない」という意味の批判をした。当時の私は工業高校に勤務していたから、私は現場の人間として発言したつもりだった。現場の人間の発言と学者の発言とを区別する言い方は、「現場の教師も研究者なんだ」と言って励ましてくれる教科の山住さんとはあまりに違っていた。これ以後の私はとくに誘われぬ限り、産業教育研究連盟の夏の大会には参加しないことにした。ただしこれは私個人の判断であって、技教研としての意見とか判断ではないし、格別敵対的な関係になったわけではなかったから、その後も何回か雑誌には書かせて頂く機会があった。ただし、団体としてではなく、私個人の意見が批判された時には反論した

こともあった。また川瀬某という聞いたことがない名前(恐らくはペンネーム)で私や仲間の見解を正面から批判した論文が雑誌『技術教育』に掲載された時は、雑誌『教育』の紙面を借りて私も正面からこれを反批判したことがあった。

### 農業教育研究協議会のこと

1960年代初頭には、技術教育研究会の活動に刺激されて農業高校の教師たちが組織した民間教育研究団体として農業教育研究協議会も誕生した。62年6月には両団体共同の研究会を開催したので、技術教育研究会の『会報』第30号(1962年6月)は、同協議会の会報『農業教育研究』第6号との共同号という珍しい号になっている。この農業教育研究協議会の活動はのち一旦休止し、71年に改めて農業高校連絡会が創立され、これが74年に現在の全国農業教育研究会と改称して今日に至っている。

### 胃潰瘍になる

1963年だったと記憶するが、毎日多忙な生活を送っているうちに、空腹時に、胸と背中がひどく痛むようになった。あまりに痛みが激しいので、東京の三葉病院で検査をしたが原因不明とのことで「胸痛」という奇妙な診断書もらった。何やら薬もらったものの一向に回復しないので、築地の国立がんセンター病院で検査したところ、典型的な胃潰瘍と診断され、何ヵ月か学校を休んだ。入院するように言われたので手術でもするのですかと尋ねたところ、仕事の忙しさが原因だから休ませるためには入院しかない、とのことであつた。仕事をせず、新聞も読まないなら入院せずともよいというので、入院はしないで済ませた。数ヵ月も薬を飲んでると、すっかり快復した。

元通りの活動をする、また胃潰瘍が再発し、その都度、国立がんセンターのお世話になった。こんなことをその後も名古屋に替わる頃まで、何回か繰り返した。(続く)